

馬したいト旨の通告があつた。
(日・水・研)

日本海区水産試験研究 連 絡 ニ ユ ー ス

日本海

(55)

漁法の科学化について

黒木敏郎

科学化という言葉は妙な言葉である。題名をヒがんで読めば従来の漁法が如何にも非科学的でありそうにも聞えるが決してそんなつもりではない。こゝに述べようとするのは漁法の如何なる面に科学化されるべき点が残つて居るかという事なのである。

漁法と言へば、某漁具を以て某漁期に某漁場で某漁群を経済性の成り立つように漁獲する事のうち漁具とその使い方のみを意味するものと考へられ勝であるがそんな狭い意味でなくともっと広い見方の漁法を考へよう。魚探機で水平垂直の移動を調べたり底質源浅を測つて好漁場を確認したりすることも明かに漁法の科学化でありこれによって従来の漁法が大巾に改良されたのはかくれもない事実である。綿糸製の網や網を化繊製に替えて漁具の方も大いに進歩しつつある。

つまり漁法の道具である漁具・対象物である漁群・場所である漁場……之等の科学化は着々と行われつつあるのに、ひとり漁期だ

第 56 号

新潟市万代島
日本海区水産研究所

印刷
株式会社早川商店
昭和30年9月18日

期に因しては全く運天委せにしか出来ないう所に伏在するものである。時間はずいぶん流れて行つて又二度とかえらぬ。まだ小さな魚群の到着を鶴音して待つたり、もう魚群が居そうなものだと魚探で大海原を駆けめぐり、それ水温だ塩分だと言つて漁期の到来の予見に懸命となる。これらはよく考へてみるに無慈悲に経過して行く「時の流れ」とその高次函数である海況漁況の変化とのつながりを我々人間がまだ明確には把握できないから生じた勞多功少の動きである。

せんじつめれば漁法の科学化の最も遅れて居るのは漁期の選定即ち時間の関係する面である事が明白となる。

我々は神探でない悲しさに、連続現象である「時の流れ」をやれ一年たとかそれ一ヶ月だとかの単位に区切つて漁況や漁獲量を眺めざるを得ない。毎年の漁期を固定して考へればこそ林長や軍令の組成変動も生じようし魚種の組成も変わるであろうことは又やむを得ない。之を統計的に処理して何等かの法則性を見出そうとするのも或は一つの手法ではある。何となれば余り深山の独立変数から成り立つ現象はしばしば統計的に処理せられて一時的には説明せられることもあるからである。推計学が水産一般でもはやされた原因もこゝにあるものと思われ、しかし、あらゆ

主なる項目

— 第五十六号 —

- 漁法の科学化について 黒木敏郎
- 中型汽船底曳網漁業の新漁場開発試験採集について
- 沿岸零細漁区の水産試験場市村要
- 浅海增殖事業効果認定調査
- 日本海沿岸に於ける青年活動の状況
- 予 告
- 人事異動

他の自然科学が決定論(因果律)的段階から非決定論(統計学)的段階へ移り更にこの両者を両極端とする中間論(サイボティック)的な段階へ発展して来たのと同じように、我が水産も又この途を辿るべきは弁証法的考察にまつまでもなく明かなことであろう。

では時間関係の現象を説明するのによい方法はどこに求められるのか。筆者はこゝで「水産に於ける準エルゴード(Mergo)性の再認識」ということを提唱したい。エルゴード性とは簡単に言へば「いくつかの周期現象の複合で成立する現象は相当長い時間経過の後には初めと殆ど同様な状態へ戻る」と表現出来るような物理学上の定律である。素人の我々が考へても各要因現象の素周期の最小公倍数的周期をもつて当初と似た状態へ戻ることは当然だとうながける所である。逆に言うならば相当複雑な変動を示す現象でも幾つかの遅うた周期をもつ素要因に調和析出するのではないかという事である。

は実施させておるが、日本海方面の漁場開発
助金及び関係府県の実施計画は次の通りであ

肉類さんから題目を出されたとき、実は私
はドキッとした。私共の所の漁民は、会談で
も対談でも、漁民という言葉を充分な知を
こと更察細漁民と表現するならわしになつて
いるが、私にはその階層を、どう定義してよ
いかよく解らないのである。仕方がないので
、こゝでは一応先徹の企画水産部課長水試場
長合同協議会を三宅未満や無動力或は小型定
置浅海漁業などをやっております。二九年度漁業
センサスで總生産体数の八五%を占め、而も
漁獲高總量の僅か一七、六%の水場にしかなら
ない漁家層を、零細漁民と考へ筆をすゝめる
ことにしたい。口では、こうして漁
家層に対しては強かに助成するため
漁民の共同化によつて、漁場の総合
的高度利用の方向に推し進め、又積
極的に魚礁設置などもやり、全面的
な漁場改良や漁場保護を徹底させや
うと努力しているが、地方では、こ
うと努力しているが、地方では、こ
の金融ベースにのらない気の毒な層
種に対して系統扶育を通じて出来る
限りの助長行政に力を入れているが、未だしの
愾が深く漁民は彼等の依存度の高い知事の承
産施策を欲求している、と、こゝで、漁家層を
分析してみると八五%のうち大体四〇%程度
が、我々が対象とする漁業の専業又は専一
兼業を見られぬやうな気もする。私は、二六年
春就任早々、庶民はやめて漁民の試験場とし
て、運営するといふ公約を、改めてせねばな
らぬ時代に当場の運営を引受けたが、内地帰
還と共に宿命的にこうして漁家層と取組む産
れっきにあつたものと観じて満足的に仕事に

魚 探

教中できる年頃にもなつたのである。水試
は施設と人を造ることにあると直感したし
本県の漁師は沖のことばかり走って聊下の地
先を忘れていたとも見てとつた。漁民の試験
場なら先づ五十年を基た庁舎を建てなほさね
ばならぬ。人も代へねばならぬ。中味をや
り直すには子ツトヤソツトの手向ではやれぬ
から政策的に協力してくれる手向ではやれぬ
らねばならぬ。次の漁村を七負小青少年が水
試を我家と積むやうにしなければならぬ。
こゝからこゝから私の水試再建整備工作が始
まつている。勿論これには行政方針との緊密な
連携がこれとなくなくてはならないこと
は当然である。荒削りではあるが、一
志当初の構想の三年間、実現した。次に
漁村の定置漁業の漁場の改良と水試の整備と
細試村
人な方式でやらせるかについて、郵
政指導層の熱意をかきたて漁民の関
心を高めるやう、真珠養殖は当場
、母貝増殖は組合地先で、又ワカメ
、テングサを主体とした増殖事業には
必らず取組を立合せ所村組合或は青年婦人会
は絶対に出動するという体制がやつと習慣的
になるまで漕ぎつけた。(本県はこの面で非
常に遅れている)。又私の管内の部落では
獲つてくれれば組合が売ってくれるといふ觀念
の漁師が殆んどで、折角の漁具や漁船の消耗
と自分の労力を、どうして高価に売りと売ら
せるやうな施設に改善させやうと気を配るも
のはごく稀で、私共は漁村を回る度毎に、約
三年間叫び続けてきた、やつと艱水所と冷蔵
庫が又共同加工場がテラホラ出来るやうにな
り、煮干イワシの筵干しがどうにか部落から

姿を消してくれたのである。
私が次にせねばならぬことは、水試は独自の
漁撈作業を極度に制限して、漁場の基礎調
査(広報活動)に専従できるやうにし、その
代り漁村青年グループと取組んだ漁家の経営
分析から今後の沿岸漁業形態を作り出すため
に、水試のもつての物と頭とが漁民の研究
組合と全面的に共同して、漁撈作業をやり、
部落推進の先達ともなり、試験資料を得ると
共に共同化、多角化を推進してゆくことにし
た。
今一つは、大型指導船を造つて、東南アジア
へ漁民を誘導するやう基地の兩府をやり、沿
岸漁場から漁船や漁民を向いくことを実現す
る役目が残っているやうに思えてならない。
(山口県外海水試場長)

浅海増殖事業 効果認定調査

昭和三十年七月十一日付水産庁長官からの
連絡によれば、本年度日本海沿岸の標記事業
実施府県は次のごとく五県と決定、その補助
金交付総額は五十五万円である。
山形県 五〇(万円) 栗磯
富山県 五〇
石川県 三五
福井県 一九〇
鳥取県 一九〇
岩面播破
魚礁設置
因みにこれら諸府県における右増殖事業の
調査指導は日水研の如藤、小川両技官が担当
することになっている。

昭和三十一年
九月四日
永徳三三七七九

